

第10話 護良親王と楠木正成

もりなが くすのきまさしげ
 護良親王の盛んなご活動と忠臣楠木正成の智謀にすぐれた千早の籠城とが、
 かんぶん きんのう
 大いに諸国の武士を感奮させて、勤王軍を起こさせる。

さて、こうして何もかも片づく、幕府は承久の時と同じように考えて、大いに勝ったつもりで全く安心した。ところが、間もなく勤王の軍が四方に起こって、終に北條氏は亡ぼされることとなるのですが、それには先づ大塔宮護良親王の盛んなご活動と忠臣楠木正成の智謀にすぐれた千早の籠城とが、大いに諸国の武士を感奮させて、義兵を起こさせる至った功績を述べなければなりません。

般若寺の護良親王

だいたのみや もりなが ひえいざん のが しばら ひそ ようす
 大塔宮護良親王は、さきに比叡山から奈良に遁れて、暫く潜んで様子を見ておられるうちに、間もなく笠置の山は陥り、天皇は囚われの身となられてしまったので、今はとて正成の赤坂城に赴かれたが、終にここもまた陥ったので、再び奈良に遁れられて、般若寺というのに、こっそりと潜んでおられた。これをどうして知ったか、鎌倉方に心を寄せる他の寺の坊さんが、ある日、500騎の兵を率いて、夜のほのぼの明けに般若寺に押し寄せた。

おりあ ふせ ぞくへいども
 折悪しくご家来は一人もいなかったの、一防ぎ防いで逃げるわけにも行かなかった上に、賊兵共は既に寺の中に打ち込んだから、紛れて逃げ出すわけにも行かない。今は自害するより外はないと思われ、すで はだぬ はらき おそ
 て、既にお肌を脱がせられたが、待てよ、腹を切るのはいよいよいけない時になってからでも遅くはない、かく
 隠れられるだけは隠れてみようと思ひ返して、仏殿の方をご覧になると、人の読みかけておいた大般若経の唐櫃が3つある。二つの櫃は蓋がしてあったが、一つの櫃はお経を半分以上も取り出して、蓋もせずにあった。この蓋の開いている櫃の中へ御身を縮めてお伏しになり、その上にお経をかけて、若し捜し出されてたら突き立てようと考えられて、氷のような刀を抜いて腹に当て、賊兵が、「ここにこそ」という一言を待っておられた。

ほど みだ い ぶつだん てんじょう さが
 程なく賊兵共は仏殿に乱れ入って、仏壇の下、天井の上までも残る所なく捜したが、見つからないので、こいつが怪しい、あの大般若の櫃を開けて見ようと、蓋のしてある2つを開けて、お経を取り出し、そこ かえ
 底を翻して見たけれども、おられない。蓋の開いたのは見るまでもないとて、賊兵共は皆寺から出て行った。

あやう いのち たす も た かえ
 宮は危いお命を助かり、夢のような気持ちでなご櫃の中におられたが、若しまた賊兵共が立ち帰って、くわ さが しあん ひつ いれか
 て、詳しく捜す事もあるかと思案されて、今度は前に賊兵共の捜してみた櫃に入替わっておられた。は
 果たして賊兵共は又立ち帰って、さっきの蓋の開いたのを見なかったのは手ぬかりだったと、お経を出して見た。出しても出してもお経ばかりだったので、いよいよ、居ないと諦めて出て行った。

熊野詣での田舎山伏

くまのもう いな かやまぶし
 しかし、こうなつては、もはや奈良には隠れて₁はいられないので、則ち般若寺を出て熊野の方へと

落ちられた。 お供の人々は光林房玄尊、赤松律師則祐、村上彦四郎義光、などのすべて9人で、宮を始め、お供の者も皆柿色の衣に笈（訳注：書物などを入れて背負うもの）を掛け、頭巾をかぶって、田舎山伏の熊野参詣の体に見せた。 山を越え、谷を渡り、遥かに遠く海岸をまわって、漸くにして熊野の附近まで行き着いたが、様子を探ると、熊野の僧徒はその大部分が鎌倉方で、迎も宮をお迎えなどしそうな風ではなかったので、俄かに思案して、大和の十津川の郷へと向わせられた。

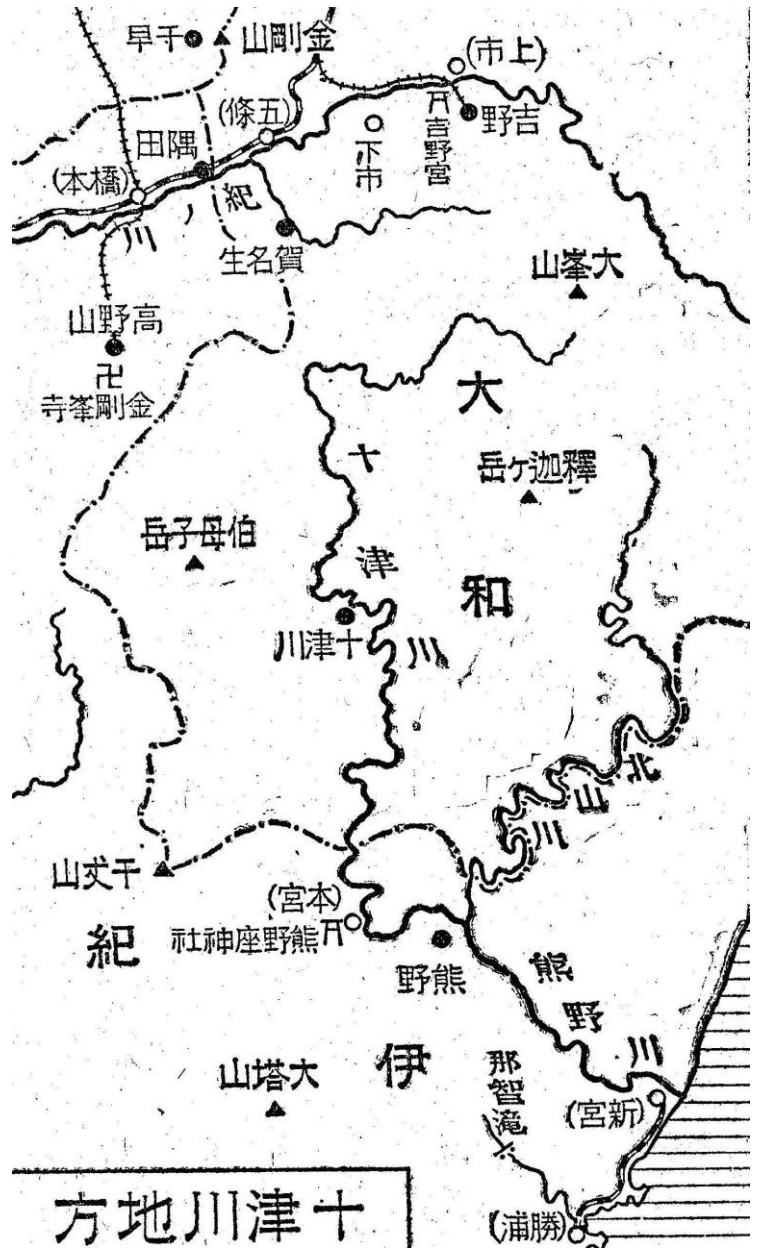
此の地は、昔から人も馬も通わぬといわれたほどの險阻なところ。 30余里の間に絶えて人里のないというような山の中の険しい路を、非常な艱難を重ねて、やっと13日目にと十津川にお着きになったが、その時にはもうお供の人々も皆飢え疲れて、はかばかしくは歩くことも出来ないほどでありました。

十津川の郷

それで宮を、とある辻堂にお置きして、お供の人々は民家に行って、熊野参詣の山伏共が道に迷って来た由をいうと、民家の者共は気の毒がり、粟飯や橡粥などを取り出して、くれた。 宮にもこれを差し上げて、2~3日は過ぎたが、いつまでもこんな事をしてはいられないので、光林房玄尊は誰か相当な者に頼らなければと思いつきながら、とある民家の、これこそ相当な人の家らしく思われる所に行って、召使の子供が出て来たのに主人の名を問うと、戸野兵衛の家だと答えた。

さては、これがそうか。 予ねてその名は聞き及んでいる。 いかにもしてこれを頼みたいものだと思つたので、門内に入って様子を見聞きしていると、内には病人があると見えて、「貴い山伏が来ればよいに。 祈って頂くものを」という声が出た。

玄尊は、これはうまい事があると思つたので、声を高らかに揚げて、「これは那智の滝に7日うたれ、那智のお山に1,000日籠って、33ヶ所の巡礼に出た山伏どもが、道に迷つてこの村に出た者です。 どうか1夜の宿をお願ひしたい」



という、内から下女が出て来て、

「これこそ 仏様のお引き合わせでございましょう。 内の奥様がご病気でおられるのですが、祈って頂けましょうか」

と言ったので、玄尊は、「いや、わしなんかだめだが、あの辻堂に足を休めておられる先達こと、必ず効験のあるお方です。 お連れもうしまししょう」と、走り帰って、この由を申したので、宮を始めお供の人々も皆兵衛の館に入った。

戸野兵衛

宮は、病人の寝ている所にお入りになって、ご祈禱をなされた。 この病人は、物怪とって、何かの怨霊に苦しめられていたのですが、宮が千手陀羅尼というお経を2,3べん高らかに詠んで、数珠を押し揉まれると、その物怪は大いに恐れて、病人の体を立ち去ってしまったので、病人は忽ち直った。

兵衛は大いに喜び、「これとって蓄えた物もございませんから、特別のお礼は差し上げたくとも出来ません。 せめて10余日はこれにご逗留なされて、お疲れをお安め下さいませ。 こっそりとお立ちになどならないように、これをお預かり申して置きます」とて、一同の笈を一緒にして奥へしまった。 お供の人々は表にはその色だにも見せなかったが、心の中では皆非常に喜びました。

こうして10余日を過ごした時に、有る夜、兵衛は宮の御前に出て、四方山の話をした序に申すには、

「皆様も定めてお聞き及びでございましょうが、本当でしょうか、大塔宮は京都を落ちられて、熊野の方に赴かれたと申しますのは。 熊野の別当の定遍は、鎌倉方でございまして、熊野辺にお忍びになることは逆もできますまい。 いっそこの十津川へおいでになればよいのに。 狭い処ではあります。 四方は皆険阻で、40～80 kmの内には鳥すら飛んで来られません。 その上、人間は正直で、弓矢の道にもすぐれて居ります。 お隠れになるにはこの上もない処です」

といったので、宮は誠に嬉しげに思われた様子で、若し大塔宮などがこの地に頼ってお出になったら、頼まれるつもりかとお尋ねになると、兵衛は、

「申すまでもありません、不肖の身ではありますが、わたくし一人さえ斯うと申しませれば、この十津川の郷は申すに及ばず、吉野十八郷の者までも指を指すものもありません」といった。

その時、宮がご家来の一人にきつと目配せをなさると、その者は兵衛の側に居寄って、「今は何をかお隠し申そう。 あの先達の方こそすなわち大塔宮でございまして」といったので、兵衛は尚も不思議げにて、人々の顔をつくづくと見ているうちに、ご家来の2,3人が、「ああ熱い」とて頭巾を抜いて側に置いた。 眞の山伏でないから、月代の跡が明らかに分かる。

兵衛はこれを見て大いに驚き、「さては眞に山伏ではおわさなかった。 そうとは存せず、此程からご無礼ばかりいたして、まっぴら御免くださいませ」と、遙かに下がってお詫びを申し上げた。

竹原八郎入道

第10話 護良親王と楠木正成

こうして兵衛は、俄かに黒木の御所を造って、宮を守護し奉り、四方の山々に関所を設け、路を切塞いで用心を厳しくしたが、自分の力だけでは猶不安に思ったので、一層有力な叔父の竹原八郎入道にこの由を語ると、入道も即座に兵衛の言葉に随い、やがて自分の館へ宮をお入れ申して、誠心を籠めてお仕え申した。

宮も大いにご安心の上、ここに半年以上もおいででしたが、その間に還俗して、名を護良と改められた。これまでは坊さんで、尊雲法親王と称しておられたのです。時に元弘2年6月の頃でありました。

熊野の別当定遍

熊野の別当定遍はこれを聞いて、十津川に攻寄せせる事はたとえ100,000騎の兵があっても出来ない事なので、その辺の人々の欲心を利用して、宮を余所へおびき出し申そうと考え、道路の辻々に札を立てて、「大塔宮を討ち奉った者には、誰にでも、伊勢の車間庄をご褒美に下さるとい幕府のお達しである。其の上に、定遍が3000貫のお金をやるぞ。また、お仕え申す人を討った者には500貫のお金をやるぞ」という意味の事を広く触れた。いつの世にも欲には目の眩む者が多い。戸野兵衛が大丈夫と受合った十津川の郷の者にも、中には心を変じて、怪しい振る舞いを見せる者が出て来た。

宮は、こうなつては、もはやここにも長くいるわけには行くまいから、吉野の方へもおいでになろうと仰せられたが、竹原八郎入道が、「何がおこりましょう。大丈夫です」と、強いてお留めしたので、折角の彼の心を破るのも気の毒と、また暫くはそのままにしておられたが、そういううちにも危険は刻々を増すように思われたので、ついにある夜、僅かのご家来と共に、密かに十津川を出て吉野へ向かわれました。

芋瀬の難

その途中、芋瀬という処をお通りになろうとすると、そのの庄司が道を固めているのに出会った。宮は見逃してくれるように頼まれると、庄司は、「ただお通し申し上げては、あとで鎌倉からお咎められた時に言い訳が立ちません。と、宮をお留め申すのは恐れ多い事ですから、お供の人々の中で、相当な方を一兩人、お渡しく下さるか、さもなければご紋の旗を下さませ。それを合戦をした証にいたします。この2つともいけない事でございますなら、よんどころなく一軍する外はありません」と誠に余儀なげに申し出た。

宮は、いろいろ御相談なされた末に、終に日月を金銀で打って著けた錦の御旗を渡してお通りになった。

村上彦四郎義光

暫くしてから、村上彦四郎義光は、遙かに道に遅れて、宮に追いつこうと急いで来ると、芋瀬の庄司とはたと出会った。見れば、宮の御旗を庄司が家来に持たせている。怪しんでわけを問うと、こうとうと其のいわれを語る。義光は、「何だと？ 忝くも日本国の主でおられる天皇の御子が、朝

第10話 護良親王と楠木正成

てき せいぼつ ため 敵をご征伐の為にご出発なさるといのに、^{てまえ}手前らのような者が^{さよう}左様な事をする法があるか」といって、
^{すなわ}即ち御旗を奪い取り、おまけに旗をもった^{つか}芋瀬の家来の大男を掴んで、4,5丈ばかりも投げつけた。そ
の^{だいき}大力に恐れたのか、^{しょうじ}芋瀬の庄司は一言の返事もしなかったので、^{よして}義光は御旗を肩にかけて悠々とその場
を立ち去り、^{ほど}程なく宮に迫いついて、この事を申し上げると、^{ほほえ}宮は誠に嬉しげに微笑まれて、^{よして}義光の武勇を
^ほ誉められた。



にしき はた うば かえ むらかみよしみつ
錦の旗を奪い還す村上義光

紀伊の援兵

続いて^{たまき}玉置の庄司という者が道^{みち}を固めていたが、これは全く宮のお諭しを^{さとし}承^{うけたま}わらずに、^{いちづ}一途に攻め
かかって来ようとしたので、すでに危ない目に遭おうとされたところに、^{おり}折よく、^{さき}曩に宮がお下しになっ
た^{りょうじ}令旨を奉じて兵を起こした者が、紀伊から^{ひき}3,000余騎を率いて参ったので、そこをも無事に通られた。
宮はこの援兵に^{えんべい}大いに力^{ちから}を得られて、やがて吉野にお着きになると、その地の^{そうへい}僧兵らをも身方となされ、

吉野の寺を城として立籠たてこもられました。

この頃、河内の方では、すでに楠木正成まさしげが金剛山の千早こんごうざんに城を築いて、次第ちはやに勢力きづを拡めていました。

楠木正成の赤坂城奪還あかさか

初め、正成まさしげは、赤坂城あかさかで自害じがいしたように見せて行方を晦ゆくえましたが、翌元弘2年の秋になると、500騎くらを率いいて、俄かに赤坂城を守っている賊将ぞくしょうの湯浅入道ゆあさにゆうどう定佛ちやうぶつを攻めた。この時、城中には兵糧ひやうろうが乏とぼしかったと見えて、定佛ちやうぶつが領地の紀伊の国から人夫5~600人に兵糧ひやうろうを持たせて、夜中に城へ入れるという事いを正成まさしげはほのかに聞いて、兵を途中の要害ようがいの地にやっちて、悉ことごとくこれを奪うばい取った上に、その俵たわらに鎧よろい冑かぶとを入替いえて馬いに負おわせ、人夫にんぶに持ちたせて、兵を2~300人ほど、敵定佛ちやうぶつの兵士かっこうのような格好かっこうにして、城中に入ろうとするのを、正成まさしげの兵が追おい散ちらそうとする真似まねをして、追おいつ返かえしつ、同士軍どうしいくさをしていた。

湯浅入道ゆあさにゆうどうはこれを見て、自分の兵糧まさしげを運び入れる兵士が、正成まさしげの兵と戦っているのだと思い、城中から打まさしげって出て、追まさしげわれて来た敵の兵を城中に引き入れた。正成まさしげの兵は思まさしげうままに城中に入り込んで、俵まさしげの中から鎧冑みかたを取り出たまして身ときを固こめると、忽こえちどあとと関きどの聲こゑを挙げた。城あの外の楠木勢きども同時きどに木戸きどを破やぶり、堀へいを越ゆえて攻め入あったので、湯浅入道ゆあさにゆうどうも全あく呆あれて、戦あうことも出来あずに忽あち降参あして出た。

楠木正成、京都の敵を脅かす

こうして楠木正成まさしげは難なんなく赤坂城を奪うばい還かえすと、今度は兵を摂津の住吉せつつ すみよしから天王寺てんのう じあたり辺まで出あして、しきりに京都に攻上せめりそうまな様子を見せた。六波羅ろくはらでは大しやうしゆういに驚まさしげき、諸国の武士を招集まさしげして、正成まさしげが今いまや攻上せめって来くるるかまと待まさしげっていたが、もともとこれは正成まさしげの計略けいりやくでして、ただ京都の敵を脅おびやかして見おせただけの事たなのですから、いつまで経たっても攻上あっていかない。

六波羅では、さらばこちらから押し寄せて打ち散おらせようとして、五千騎の兵を向けて攻めさせたが、忽まさしげち正成まさしげの計略けっしにかかかって大まさしげいに敗かれた。この上まさしげはと決死の兵を重かさねて送まさしげると、正成まさしげは既に遠く赤坂に兵を引あいて相手あにならない。敵あが大まさしげいに勝まさしげったつもりで京都に引き上げると、正成まさしげは直ぐにまた兵を出まさしげしてその後を占領する。まったく六波羅の軍勢ぐんぜいは、正成まさしげに好きあなように操あられて、あちこちと行あったり来あたりしたのです。

その上、正成まさしげは諸方しよほうに兵を出いして大いいに威勢いせいを張はって、民家みんかには迷惑めいわくをかけないようにし、士卒しそつをもよくいたわって用ふういたので、その風ふうを慕したう者しが次第しだいに多おく、近国きんごくは勿論もちろん、遠い地方とちほうの役人やくにんまでも、われもわれもと馳加はわったから、その勢せいいはますます強あく大あきくなって、その年の冬の頃には、既に六波羅の勢力せいりきだけではどうすることも出来あなくなった。

正成まさしげが金剛山の千早こんごうざんに城を築きづいたのもこのころです。彼は赤坂城には部下のきづ一将あを置いてこれを守あらせ、自分おは千早よに據おって大きいに氣勢きせいを揚あげた。

驚おどろいたのは鎌倉幕府です。死はずんだ筈まさしげの正成あが現だわれたばかりでなく、大塔宮だいたうのみやまでが既に吉野たちに立ち籠こもられて、その上、しきりに令旨れいしを諸国つに下つして兵をお募おりになっているというのです。これは大事おおごとだ、

第 10 話 護良親王と楠木正成

早く討手を遣わして打滅ぼさなければならぬと、則ち元弘 3 年正月、高時は数十万の大軍を發して、吉野、赤坂、千早の 3 城を攻めさせました。

赤坂城の陥落

真っ先に戦争を始めたのは赤坂城に向った阿會治時の軍です。例の一握りにも足りないような小さな城を、凡そ 8~90,000 の関東勢が雲霞の如くに取巻いて、毎日毎日息も継げずに攻め続けたにもかかわらず、城兵はよく防いで、毎日寄手に 5~600 の死傷者をださせたほどでしたが、ついに 14 日の後に、遥かの山中から地の底に引いて来た水の手を発見されて絶たれたので、更に数日の後に、城中の飲む水がなくなってしまったので、今は防ごうにも力が尽きて、遂に城は陥り、主将の平野将監は 30 人の部下と共に捕らえられました。

千早城へは大佛高直が数十万騎を率いて向い、吉野へは二階堂道蘆が 60,000 騎を率いて向った。

吉野の落城

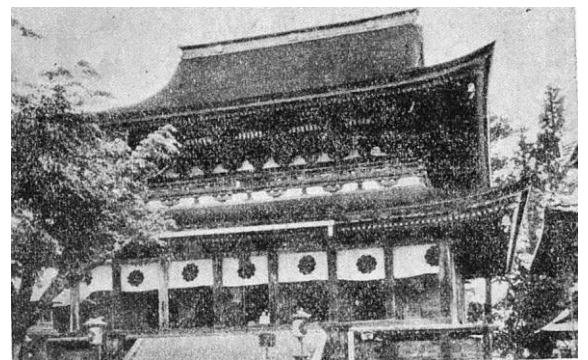
吉野の城は高い山の上に在る。道は細く、賊軍は多勢を恃んで、入替え入替え、7 日の間攻め続けたが、ここでも寄手に負傷者が出るばかりで城中は一向に弱るけしきもない。そのうちに、赤坂城は既に陥ったという知らせがあったので、寄手はいよいよ気を揉んで、終に城のうしろの山の金峯山に一隊の兵をまわして、前後から一時に攻立てる策を立てた。金峯山は非常に險阻な山であるので、官方では全く安心して、何の防備をもして置かなかった。それで忽ち敵の一隊に忍込まれて、ある朝、大手から攻上った 50,000 騎の賊軍と前後から火を放って押寄せられた為に、ついに官方の軍は敗れました。

大塔宮の奮戦

この時、山上からは馳下って来た 150 人の賊兵が、大塔宮の御座所である蔵王堂へ打ってかかると、宮は今ほ遁れぬところと覚悟なされ、赤地の錦の鎧直垂に緋威の鎧のまだ新しいのを召され、龍頭の冑の緒をしめ、3 尺 5 寸の小長刀を小脇に挟み、一騎当千の勇士 20 人を左右に従がえられ、群がる賊兵の中に走りかかって、東西を払い、南北へ追廻し、黒煙を立てて切って廻られた、賊は大勢ではあったが、わづかの小勢に切り立てられて、木の葉の風に散るが如くに四方の谷へ颯と引く。

最後の御酒宴

敵が引くと、宮はこの間に最後の祝宴をなさろうと、蔵王堂の大庭にご家来と一緒にいられた。見れば御鎧には七本の矢が立ち、御頬先きと二の御腕とには 2 ケ所の突き傷があつて、血は滝のごとくに流れている。その血をも拭われず、その矢をも抜かれずに、敷皮の上に立ちながら、大杯を 3 度傾けられた。



蔵王堂

木寺相模という御家来が、4 尺 3 寸の太刀の先きに敵の首を指貫いたのを持って、悲壮な劍舞をする。大手の合戦はいよいよ急になったと見えて、敵、身方の鬨の声が合い交じって聞こえる。

その折から、大手の戦いに向っていた村上彦四郎義光は、鎧に立った矢を 16 筋折懸けたままで宮の御前に参って、
 「大手の一の木戸は意気地なくも攻破られましたので、二の木戸を支えて暫く戦っておりますと、ご酒宴の声が聞こえたので参りました。

村上彦四郎義光の忠死

もはやこの城を保つことはできそうにありません。まだ敵が兵を余所にまわさぬ先に一方より打ち破って、一先づ落延びてご覧なさります。但し、跡に残って戦う者がなければ、敵がどこまでも追いかけて参りましょうから、恐れながらお召しになっている錦の御鎧直垂と御鎧とを賜り、御名を名乗らせて頂いて、敵を欺き、お命に代わりましょう」

という、宮は、

「どうしてそんな事が出来よう！ 死なば一緒にと思っているのに」

と仰せられると、義光は言葉を強く、

「そんな情けないことがありますか。宮は天下の大事を引き受けられている御身ではありませんか。どこまでも生きようとなさらねばなりません。さ、早くその鎧をお脱ぎなされませ」

と申して、鎧の上帯を解きますと、宮も尤もと思われたのか、鎧から鎧直垂まで脱替えされて、「われ若し生きていたら、汝が後生を弔うぞ。共に敵の手にかかったら、冥土までも一緒にいこうよ」と言われて、涙を流しながら、城の一方から落ちられました。

義光は二の木戸の高い櫓に上り、俄かに見送り奉って、宮の御後ろ姿がかすかに見えなくなると、今は大丈夫と思ったので、櫓の窓の板を切り落として身を現し、大音声に、「天照大神のご子孫、神武天皇より 96 代の帝、後醍醐天皇の第 3 の皇子護良、逆臣に亡ぼされ、恨みを地下に報いんがために、唯今自害する有様を身置いて、汝らが武運の尽きて腹を切らん時の手本にせよ」と言うままに、鎧を脱いで櫓から下に投落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、絹の二重小袖となった膚を脱いで、白く清げな膚に刀を突立て、左の脇から右のわき腹まで一文字に掻切って、腸を掴んで櫓の板に投げつけ、太刀を口に啣えて俯伏せになって伏した。賊兵どもはこれを見て、「それ、大塔宮の御自害だ。我先に御首を賜ろう」とて、四方の囲みを解いて二の木戸の櫓に集まる。

村上彦四郎義隆の忠死

その間に宮は遠く落ちられたが、たまたまその方面から廻って来た賊軍の一隊が、行く手の道を横切りかけて、この落人の一行を見つけて討ち取ろうとした。村上彦四郎義光の子の義隆は、父が自害した時に一緒に腹を切ろうとしたのを、しばらく生きて宮の行き先を御護り申せと父に強く誠められて宮のお供に参っていたが、この時、こういう事が危急に迫って来ては、自分が討死にせずば、逆も宮が無事に落ちられることは出来まいと思ったので、只一人踏留まって、曲がりくねった細道に待ち受け、追ってかかる敵の 500 余騎を相手に一時間ばかりも支えていたが、ついに 10 余箇所の創を受けたので、今はこれま

第10話 護良親王と楠木正成

と、小竹の一叢茂った中に走り入って、腹を切って死んだ。時に義隆は18才でした。

義光と義隆の父子が、こうして敵を防いで、討死にをしている間に、宮は危ういところを遁れて、紀州の高野山に赴かれました。

高野山の護良親王

一方、二階堂道蘊は義光が宮の御真似をして腹を切ったのを本当と心得て、その首を取って京都に上らせたが、六波羅で首実験をすると、全く違った者の首であることが分かったので、その由を聞いて大いにうろたえた。更に宮の行方を尋ねた末に、ついに高野山へ押寄せて、宮の行方を尋ね求めたが、高野の坊さんたちが皆心を合わせてたくみに宮をお隠し申したので、捜し宛てずに軍を旋して、今はこれ一つがまだ分からずにいる楠木正成の千早城に向った。

千早城の正成

千早城の寄手は初めの数十万騎に、赤坂の勢も、今また吉野の勢も馳加わって、百万騎にも余ったので、城の四方23里の間は全く人と馬とで埋まり、地面の色も見えないほどでありましたが、楠木正成はこの大軍にも恐れずに、僅かに1,000人にも足りない小勢で防ぎ戦っていた。

この城は、東と西は谷が深く切れて人の登りようは無く、南と北は金剛山につづいて、而も、峯が高く峠っている。

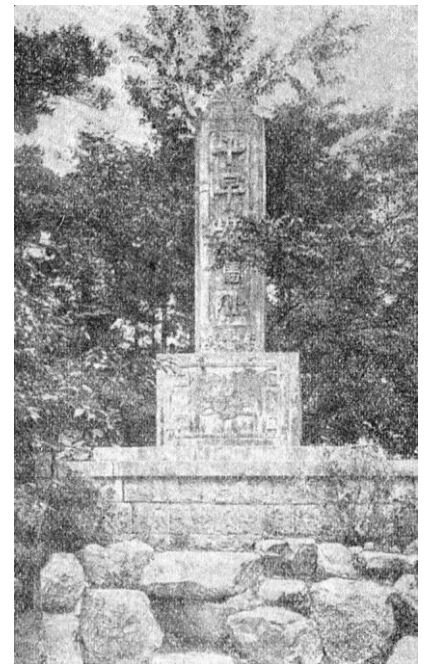
けれども、高さは220mばかりで、周囲は4kmにも足りない小城ですから、何程の事があるかと、寄手はこれを見侮って、初めの一兩日は、向い陣をもとらず、攻支度をも用意せずに、我先にと城の木戸口の辺までぞろぞろと這上がって行った。

城中の者は少しもさわがず、静まり返って、高櫓の上から大石を投げ掛け投げ掛け楯の板を微塵に打砕いて、ひるむところをさしつめさしつめ射たので、四方の坂から転落ち、落ち重なって、負傷する者や死ぬものが一日のうちに5~6,000人も出た。

賊軍はこれに懲りて、「今から後は、大将の許しを受けずに合戦する者をば、却って罰するぞ」と触れまわして戦いを止めさせ、曩に赤坂城を攻落したと同じように、水の手を断って城兵を苦しめようと考えた。思うに、こんな小さい山の嶺に用水のある筈はないので、多分、東の山の麓を流れる溪川の水を、夜の間に汲むのであろうというので、3,000騎の兵を分けて、その水の辺に陣を取らせ、城から人の下りて来るのを待っていた。

楠木正成の計略戦

ところが、城中にはいかなる早にも涸れる事のない泉が五つあって、飲み水には事を欠かない上に、正成は大きな木で水槽を2~300も造って水を湛え、又、雨が降れば、樋で雨水をこれらの水槽に受入れ、



千早城址

第10話 護良親王と楠木正成

その底には赤土を沈めて水の性を悪くしないようにしておいたので、少しも水には困らなかったのです。それで、城からはこの谷の水を汲もうともしなかったのを、賊兵共はそうとは知らずに夜毎に気を張り詰めて、今か今かと待っていた。しかし、幾夜経っても、ついに城兵は出て来なかったのも、後には次第に心が弛んで、さてはこの水を汲まないのだと、用心もおろそかになって来た。正成はこれを見すまして、ある夜、上手な射手を2~300人、闇に紛れて城からおろし、まだ夜の明けきらない薄闇の中から急に押寄せ、水の番兵どもを切って切って切りまくらせた。賊兵共は、不意を打たれてさんざんに敗れ、あわてて本陣へ逃帰ったが、その跡には旗や幕などが打棄てられてあったから、正成の兵はそれらを皆取集めて静かに城中に引上げました。

賊将の旗と幕

その翌日、城の前門にその旗と幕とを引いて、「これは昨日頂いた物だが、ご紋が違うので、こちらには用はありません。取りにおいで下さい」といって、どっと笑うと、昨日逃げ帰った賊兵の大將は、齒噛みをして口惜しがり、部下の軍勢と共に、一人も残らず討死にしても、あれを取返せ、と命を下したので、やがて5,000余人の賊兵は遮二無二進んで、城の切岸の下までは攻めつけたが、岸が高く切立っていて登ることが出来ないのも、ただ徒らに城を睨んで、怒りを抑えて息をついていた。この時、城の中から切岸の上に横たえて置いた大木を10ばかり切って落とすので、忽ち賊兵共の4~500人は、将棋倒しに、ばたばた押しに打たれて死んだ。その上、これに打たれまいとて、うろたえて騒ぐところを、更に八方の櫓から狙いをつけて、思うように射たので、5,000余人の賊兵は残り少なに討たれて其の日の軍は果てました。

藁人形

賊軍はいよいよ懲りて、この上は兵糧攻めにするより外はないと、全く軍を止めて、ただ遊び暮らしながら遠巻きに巻いている。これには城中の兵も困ったが、そのうちに、正成はまた一つ敵をだましてやろうと、計略を思いついた。即ち、藁で人の大きさの人形を2~30作って、甲冑を着せ、弓矢を持たせて、夜中に城の麓に立て置き、前に楯を突きならべ、そのうしろに500人の兵を交えて、夜のほのぼのと明ける霧の下から、一時にどっと関を作らせた。四方の寄手はこれを聞いて、「それ、城の中から打って出たぞ。これこそ敵の運の尽きるところだ」とて、われ先にと攻寄せた。城の兵は予ねて巧んだ事ですから、矢軍を少しするようにして、賊兵をおびき寄せると、人形ばかりを残して、兵は皆次第々々に城の上に引上げた。寄手は人形を突きの兵と心得て、これを討とうと相集まる。そこを目標けて、城中から予ねて用意していた大石を4~50、一度にぱっと放したので、300余人の賊兵は忽ちこれに打殺され、半死半生の者が500余人も出来た。

而かも、軍が果ててからこれを見れば、一步も引かない剛の者と思ったのは、皆人ではなくて、藁で作った人形である、これを討とうと相集まって、石に打たれ、矢に当たって死んだのかと思うと、さすがの賊兵共もそのばかばかしさに腹が立って、いよいよこの城を相手に合戦しようという気はなくなった。

それで、今は全く合戦を止めて、何十万という軍勢がただ徒に城を眺めながら、おのおの陣屋の中で遊び暮らしていた。歌を作るもの、碁を打つもの、双六をやるもの、中には酒を飲んで、喧嘩して殺しあう者などもいた。

敵の妙計、大梯子

鎌倉ではこれを聞いて、以っての外に思ったので、使いを立てて軍の催促をして来た。何十万という大軍を以って僅かに1,000人にも足らぬ小勢に向かいながら、軍を止めて、徒らに日を送るといふ法はないといふのです。賊の大將達もこれには困って、いろいろと評議をした末、身方の陣と敵の城との間の深い堀に橋を渡して、城へ討ち入ろうといふ策を立てた。そこで、京都から500余人の大工を呼び出し、15～27cm太さの材木を集めて、巾45cm長さ6m余りの大梯子を作らせた。そして、それが出来上がると、大綱を2～3,000筋つけて、車を以って巻き立て、城の切岸の上へ倒し懸けにした。城中は静まり返っている。

投松明に油

やがて血気の賊兵共が五六千人、橋の上を渡って、われ先にと進んだ。いよいよこの城も今は落とされそうに見えたところに、正成は予ねて用意をしていたと見え、投松明の先に火をつけたのを、橋の上に蔭を積んだように投げ集めて、水弾きで油を滝の流れるように注いだので、火は忽ち橋桁に燃えつき、谷風は炎を煽った。なまじいに渡りかかった賊兵どもは、前へ進もうとすれば猛火が盛んに燃えて身を焦がすし、帰ろうとすれば、後陣の大勢が前の難儀をも知らずに押しかけている。脇へ飛び降りようにも、谷は深く、巖は険しく聳え立っている。どうしようかと身を揉んで押合ううちに、橋桁が中から燃折れて谷底へどうと落ちたので、数千の賊兵は同時に猛火の中へ落ち重なって、一人も残らずに焼け死んだ。

こうして折角の計画もまた失敗したが、実際、寄手が工夫を凝らして攻めると、正成は更にそれ以上の工夫をして防ぐのですから、寄手は城兵の1,000倍もの大兵を以って攻め囲みながら、ついにどうする事もできなかったのです。

そのうちに、高野山に隠れておいでの大塔宮の命を受けて、吉野、十津川、その他の諸方から集まって来た者共が、この山、かしの谷に立ち隠れて、賊兵共のうしろからその往来の路をふさいだので、諸国の兵の兵糧は忽ち尽きた。これには賊軍も大いに困って、次第に本国に引き返す者が多くなって来た。

それと同時に、この千早城の戦いの有様が次第に全国に知れ渡って行くと、久しく勤王の志を抱きながらも北條氏の武威を恐れていた諸国の武士らが、今はその実力の恐れるには足りない事を知って、そこにもここにも崛起して義兵を挙げた。

赤松則村の勤王

中でも、その勢いの最も盛んであったのは、播磨(兵庫県)の赤松則村である。則村の子の則祐は、

第10話 護良親王と楠木正成

だいとうのみや
大塔宮の家来で、宮が比叡山を落ちさせられた時から始終お付き申していたのですが、宮が吉野の城に立
こ
籠もられた時に、ひそ りょうじ ほう こきょう かえ のりむら すす ぎへい あ
密かに令旨を奉じて故郷に帰り、父の則村に勧めて義兵を挙げさせたのです。

のりむら こけなわじょう さんよう さんいん ふさ びぜん びつちゅう
元弘3年2月、則村は播磨の苔縄城から打って出て、山陽、山陰の両道を塞いで、備前、備中、
あ き すおう しょうしゅう おう のぼ ふなさかさん むか う やぶ
安芸、周防の賊兵らが六波羅の召集に応じて京都に上ろうとするのを船坂山に迎え撃って、これを破り、
おも
主なる敵を20余人も生捕った。けれども、彼はこれを殺さずに、こる なさ たいぐう
情けをかけて待遇したので、その恩
かんぐん がったい
に感じて官軍に合体した者も出て来た。かくして次第にその勢いが振ると、彼は山陽道を指して攻上
り、ほど ぐんぜい まやさん かま
程なく7,000余騎の軍勢となって、兵庫の北の摩耶山に城を構えた。今、北條氏の軍勢が、その大
おもむ おもむ すこぶ ぶぜい き はづ せめお
部分は千早に赴き、六波羅は頗る無勢なのを見て、この機を外さず、これを攻落とそうというのが彼の
目的だったのです。

四国と九州の勤王軍

また、四国では、いよ
伊予国の河野氏の一族である土居通増、とくのうみちつな
得能通綱が、へい あ
元弘3年閏2月に兵を挙げて
ながと たんだい ときな お へいせん そう はつ う かえ う やぶ
官軍に応じた、長門の探題北條時直は大いに驚き、兵船三百余艘を発してこれを撃ったが、却って打ち破
られて、に
逃げて帰った。

また、九州でも、ひご
肥後（熊本県）のきくちたけとき あその だいぐう じ きんのう はた
菊池武時や阿蘇大宮司などが、勤王の旗をひるがえして、九州
たんだい ひでとき う
探題北條英時を討とうとしていました。

（ 第10話 護良親王と楠木正成 終わり。 次は前頁に戻り、 第11話 北條氏の滅亡 〜 ）